舵故障のため航行が不自由との連絡が入る。

9時4分　戦闘機10機右160度来襲、爆弾投下、機銃掃射。

9時6分　戦闘機12機左145度来襲、爆弾投下、機銃掃射。

9時12分　戦闘機12機左右に分れ来襲、爆弾投下、機銃掃射。

9時15分　水雷科兵員全員小銃にて敵機を射撃せよ。戦果なし。

9時18分　前部電信室の防弾吊床より火災発生、付近火勢強く4番主砲使用不能になる。

9時42分　右70度高角70度ロッキード9機来襲、爆弾投下、命中せず。

9時43分　艦首方面よりロッキード8機来襲、爆弾投下、命中せず。

9時45分　各部署の状況報告するよう命令。視界内に敵機影を見ず。

11時38分　ロッキード1機来襲、爆弾投下。

11時40分　ロッキード1機来襲、爆弾投下、聖川丸搭載の水上偵察機漸く発進でき、ロッキードとの対戦するも相手にされず、下駄履き（フロート付）では…。

12時10分　待ちに待った我がゼロ戦4機飛来、時既に遅く敵は凱歌を上げて引き揚げた後何の役にも立たない。今まで何をしていたのだ。

たったの半日の戦闘だったが、延べ164機余りの敵機が入れ替わり立ち替わりの空襲は、二日も三日も経ったように長く感じられた。

思えば、あの激しい空襲・爆弾投下・機銃掃射に加えて、魚雷攻撃まで受けたのに、我が夕張は機銃弾痕3千余り、67名の戦死傷者を出したものの艦の航行には異状なく、撃沈されると思ったのに、その一歩手前で敵が攻撃の手をゆるめたのはなぜだろう?…我が軍なら沈めるまで攻撃したに違いない。ここに考え方の相違があるのだろうか。血の海のような艦橋で私は左頬に傷を受けただけ。T中佐は私の腹が背中につくくらいの所に居たのに25㎜機関銃弾を受け戦死とは、人間の運は全く紙一重というが不思議なもの。これも日ごろ信仰していた仏様のご加護の賜とお礼を申し上げる。

午後は大した空襲もなく荒れ果てた艦内の整理に追われる。戦死者の納棺、負傷者の手当て、食事の手配等、時の経つのも忘れ気がついたらもう、21時00分、夜のとばりが降りてキラキラと燦めく星の中に一際目立つ南十字星の真っ赤なまでに怪しげに光る色は、戦死者の血で染めたようである。最も親しかった友4名を含め戦死者の冥福を祈りながら合掌した。

21時30分　床に就く。

■3月11日（水）晴

ボーイング5機来襲、爆弾を投下後飛び去る。

被害なし。今日も後片付けに終始する。そして戦死者を陸上に運び火葬に付す。

■3月12日（木）晴後曇

午前中戦死者、負傷者の名簿・遺品整理。

15時30分　全員上甲板に出て「海行かば」の喇叭吹奏の中に戦死者の遺骨を迎える。万感胸に迫り涙あふれる。

19時00分　ラジオのニュースが我々の戦闘の模様を大本営発表として放送した旨艦内放送である。内地でも我々の活躍を知ってくれたなと思ったが、今自分達の居所さえ知らせていないので自己満足か。

でも大本営発表の中に「戦死者1名のほか人員の損傷なし」とあった。なぜ人員をごまかして発表したのか。これでは戦死者の霊も浮かばれない。悲憤慷慨したけれどどうすることもできない。とにかく「早く戦争を終わらせなければ」の感、益々強くなる。

これは、私が艦橋でH船長の見事な指揮振りと、状況を記録したもので、夕張と共に生きた証しで、戦争が如何に悲惨であったか、その一端を知ってほしいと思う。

世界に目を向けると、各国で民族・宗教による紛争が絶えることなく発生し悲惨な状態が起きております。

幸い日本は、祖国の勝利を信じて南に北に戦い、不幸にして亡くなった多くの戦友の犠牲の上に、目覚ましい復興を遂げ、こんなにも幸せな生活で良いのかと思うほど恵まれた環境にあることは、本当に有り難いことです。

今私たちは、この環境に感謝しながら、物資面にとらわれず、精神面への豊かさを求め、世界の人々が戦争や紛争をなくすために努力し、協調して、世界平和への道を、その道は遠くても一歩一歩進まなければならないと思います。

藤森正已さん

新市の戦斗

軍工兵隊K中佐の指揮下にあって、道路築造作業が続行される山から山へ、冬とはいいながら暖かい、波がうねるように限りなくなだらかな山の起伏、松林の中に民家が点在する一幅の画といいたいような風景、南画で見るような岳南の風景そのもの、どこに敵がいるのかと思うような平和境だが、敵の撃つチエッコ機銃のヒステリックな銃声が間断なく聞こえる。大荊街（中国揚子江南岸近く）へ至る行程も夜行軍の困難を極めた。

大荊街にて軍輜重隊（軍需品輸送隊）に配属指揮下に入る。

友軍機からの通信筒により「軍輜重隊は独立混成第九旅団の重傷者の護送にあたれ」の命令を受領する。

左第六師団、正面に独混九苦戦中である。独混九の重傷者の護送のため輜重隊の馬が使用され私たちはこれの護衛隊で、銃声熾烈不気味な音をたてて近くで炸裂する迫撃砲弾、頭上をかすめる流弾の中、馬上で苦しさの余りうめく負傷者に檄をとばしながらようやく泊水近くの新市の部落に宿営することになった。

その明け方である。西側部落外れの高地に出ていたA伍長の分哨が襲撃された。指揮班と第二小隊、機関銃小隊を緊急配備、敵影は見えないが弾は近い。中隊長と前の高地まで敵情偵察に出た。前方の部落に200～300の敵がいるらしい。チエッコ機銃でバリバリと撃たれた。

迫撃砲弾が目の前に落下し始めたので、左に移動し中隊の位置まで帰る。すでにここにも迫撃砲弾が落下し始める。

先ほど偵察した高地に敵が進出して来た。距離300mくらい。間断なく迫撃砲弾が落下する。身を伏せている土饅頭に弾があたって土煙が上がる。

目の前の草や木が弾にあたって飛び散る。雨、あられとはこのことだろう。目も口も開けない。

土に付したまま、ころげながら第二小隊に攻撃を伝達する。

前の高地松林の左端に、水冷式マキシム機関銃の黒い胴体が朝日に輝いている。機関銃小隊に射撃を命ず。九二式重機関銃の歯切れのいい射撃が始まると、さすがに敵のろうばい振りがよく見える。敵の数は次第に増し、松林の中で右往左往するのが良く見える。指揮班に狙撃を命じ、第三小隊に左に移動を命じ、第三小隊が一線となるや中隊長が「突撃するぞ」と叫んだ。私はNラッパ手に突撃ラッパを命じたその時だった。中隊長と私の間にあって連絡をしていた中隊長伝令T上等兵が胸部貫通で即死した。私と言葉を交わしたアッという間、機関銃小隊でU上等兵が射撃中頭部貫通で即死した。

勇壮な突撃ラッパと同時に突撃の喚声だけあげると、案の定手榴弾投擲を受ける。

間を置いて2回敵の手榴弾の消耗を計る。擲弾筒分隊に一斉援護射撃を命じ、一挙に突撃を敢行し前の台地で白兵戦をする。

私も無我夢中、何が何だか解らない気が狂わんばかりであった。

前の高地を奪取するなり斜面をクモの子を散らすように逃げる敵を機関銃で猛射する。

そのころ友軍機が来援、機関銃掃射で追撃、午後1時ころだったろうか。5時間余りにわたる戦闘は終わった。

K一等兵は重擲弾筒手として突撃後、逃走する敵に打撃を与えたが、敵の迫撃砲弾を受け左前腕部を失い骨が露出していた。その中から「申し訳ありません」を繰り返していた。宿営地に引き上げるまで戦友の介抱を受けたが、遂に息を引き取った。

新市の西側泊水の流水に面した広場で3名を荼毘にふした。私は擲弾筒O兵長以下6名の負傷者を護送するため第三師団に連絡をとり、帰隊すると中隊はすでに整列していた。

日の丸に包まれ、戦友の胸に抱かれた3名の骨も完全に焼けるまで待つ時間的余裕は全般の情勢上許されなかったので、やむなく3名の指だけを別に火葬したとのことであった。

焼いた跡に松の木を植えて中隊全員が別れの捧げ銃をして戦場を去った。

揚子江方面の戦闘

北袋憲一さん

戦塵の思い出

向山作衛さん

戦争も苛烈な様相を帯びてきた昭和19年2月、千人針の腹巻と寄せ書きの日の丸を肩に、歓呼の声に送られ、20歳の私は東洋平和のためと信じ決死の覚悟で入隊した。

間もなく、大陸の零下30度のゴビ砂漠に近い固陽と包頭で、対ソ連戦に備えた軍事訓練や運転訓練を受けた。8月から黄河の南の河南省で20年2月まで通信訓練を受け、終了後戦車第三師団司令部通信隊に派遣され、老河口作戦に参加、6月末に本土決戦に備え北上、北京近郊の豊台で終戦を迎えた。

以来、北京で21年3月まで捕虜生活（各部隊と通信連絡）、天津で労働使役、5月祖国の佐世保港に復員することができた。

その間、忘れられないいくつもの思い出がある。

固陽での訓練は、髭や銃も凍り、3分間も耳を寒風にさらすと凍傷になるような砂漠での演習で驚いたが、5月ころから通信兵と決まり、包頭でとりあえず車両班に所属し、トラックの運転訓練、8月からの河南省の許昌での通信訓練は、入隊前の本職が通信であったため、教官の補助や代行を命ぜられ、厳しさの半面結構楽しかった。

しかし、内務班での生活は苦しく「新兵さんは又寝て泣くのかよ」ではないが、軍人精神鍛錬に名を借りた全体責任の体罰や、個人体罰も多く、「お前等は一銭五厘※で集まる奴等」と言われ、これが軍隊かと悲しかったこともあった。

3月上旬、戦車第三師団に敵空軍基地「老河口」攻略命令が出された。私達は東京大空襲や硫黄島の玉砕も知らず、通信隊は3月23日ころ出動した。以来、昼夜を分かたず銃爆撃を受け、夜間前進中は空襲の都度30キロ余りのバッテリー2個を車両から両肩に担ぎ降ろし300mも逃げたり、村落で戦闘機3機に機銃掃射を受け石碑を楯に逃げ回ったり、夕方出発直前、時限爆弾の爆発を敵襲と思い慌てたものだ。

雨の降る夜中に、掃討作戦終了間もない部落に到着設営し、送信する緊急電報を紛失し、営倉（兵隊の拘置所）ものだと叱られ、1キロほど先の暗号班まで今引いている1本の電話線を頼りに、風雨の中一人で原稿を取りに行かされた。黒く揺れて見える木々も敵兵に思えるような真っ暗なぬかるみの畑の中を、銃声を聞きながら必死の往復1時間くらいの長かったこと。

たしか、20年の8月9日ころから、無線機に妨害電波が絶えず入り、通信を妨害されていたのが少なくなり、日本語で日本は連合軍に無条件降伏した旨の放送が聞かれるようになり、半信半疑でときどき聞いていたが、8月16日朝全員集合で隊長から終戦を告げられ、軽挙妄動を慎み、皆の命は責任を持って預かる、団結して難局に対処するよう伝えられた。やはり謀略ではなく真実だった。言葉もなく皆立ちすくむ。

東京は焼け野原で、広島に原爆が落とされた。日本はどうなるだろうかと色々な想像が去来する。様々な流言飛語が飛び交い、逃亡兵捜しに出動したこともあった。

戦後の20年12月31日の夜は、ソ満国境の密雲まで、ソ連軍に武装解除された部隊の貰い下げに戦車数台で行き、零下40度近い寺の土間で、防寒服のまま皆で背中を合わせ、八路軍の敵襲に怯えながら寝たが、寒さと故郷の正月を偲び一睡もできず、交渉も駄目で北京に帰った。

また、21年3月無蓋貨車に乗せられて、引き上げのため天津に行く途中は、列車が止まるたびに、子どもらに東洋鬼（トンヤンキ）と大声で投石され、無言で避けていたときの複雑な気持ち、その子どもらも、もう60歳前後の年齢になっている。

日本が米軍に占領され、軍国主義の世の中が終わり、そして、復興にかけた日本人の努力と勤勉さが今日の繁栄をもたらしたのだ。

「二度と悲惨な戦争を起こしてはいけない」と今日あらためて心の底から叫び皆に伝えたい。

※一銭五厘の切手で召集令状が送られた。